特44
86

流儀 栗津ケ原 下の巻

宗家 橋廼翁先生校閲

265
109

牧中尋

意思緒

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題

帝室博物館藏

粟津ヶ原　下の巻

玉蘭作

かゝ所に今井四郎兼平は
雲霞の如き大敵を

馬の蹄に駈け散らし
君や何處と求むるに

主従僅か八騎にて
粟津の方に落ち行くは

慥かにそれと馳せ付けて
アナなつかしの我君や

勢田や都の戰ひに
世に見苦き恥をしも
君の尊顔今一度
心を酌みて知らずやと
舟が手を取り引き寄せて
脱くも敵を後にして
忍び〻甲斐は有つるに
見ぬ間は死なぬ兼平が
申上れば義仲は
死なば諸共一處ぞと
豫ての誓ひなかりせば
花ばなしくも討死し
雜兵原が口々に
聞かず顔にて落ちたるは
なりなん者と思ひしぞ
天晴レ都の戰ひに
武名を後に殘さんを
戻せ返せと呼ぶ聲を
汝に逢ふて兎も角も
今は望みも足りぬれば

罪作りして如何がせん
楚の項王が末路にも
似たる我身の武運かな
義兵を擧て此方に
後れを取り例しなき
此義仲が敗軍は
天命なりと知られたり
時は利からず雖ゆかず
數ヶ所の創に氣も勞れ
日頃着馴れし鎧さへ
重々しくも覺ゆなり
三世の縁厚かりき
アハレ兼平主從が
修羅の瞋恚の妄執を
いざ諸共に刺し違へ
君の仰せに兼平は
玉の緒共に絶ちなんと
ハラ〳〵とせきあへず
五臟を絞る血の涙
北國一の荒武者が

日頃鍛ひし鐵の
腸も碎くる思ひにて
言はんとすれど聲出ずず
身を震はすぞ哀れなる
やがて涙を掻き掃ひ
君の顏打ちあふぎ
コハ情なき御諚かな
前に魁の勇士なく
後に續く者なければ
此有樣にあさましく
氣落ち給ふと覺へたり
勝ちには勇み敗れには
散るにはもろき木の葉武者
頼み難きは人ごころ
只兼平が一身を
兼平かくてあらんには
足の踏み途も定らず
敵を難所に喰留めて
頼みては將た如何がせん
千騎萬騎と思召せ

行手も安く我君を
關東關西北陸と
武運の程望みあり
大將の旗押し立て、
獅子奮迅の血戰に
越路に落とし參らせん
三分割據の三ツ金輪
いで殘卒を集めんと
三百餘騎を招き寄せ
殘るは主從二人なり

かくても事も是迄ぞ
御心安く御最後あれ
籠に殘るハ筋の矢
かゝる所に敵陣に
ぢく君の最後なり
あれなる邸に落ち給ひて
兼平防矢致さんと
射て八騎をば斃しける
ドット擧げたる勝どきは
三途の瀨踏み後れじと

鞍坪に突と立ち
大音聲を揚げ
遠き者は音にも聞け
近きは寄て目にも見よ
我は木曽殿の御内にて
今井の四郎兼平とて
日本一の剛の者
最後はかくぞ見習つと
大太刀を口に銜みつゝ
真逆様に飛びたちぬ
アナ潔き今井かな
天晴れ一世の大丈夫が
忠勇義烈の物語り
聞くもなほ〳〵雄々しけれ

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109